

エピソード

1

私の名は、シュウ・クワン・リー。

傭兵として長らく海外の危険地帯を渡り歩いてきたが、いまは現役を引退し、米カリフォルニア・オークランドで妻子と共に平穏な暮らしを送っている。

第二の人生を始めるにあたって、地元の高校で教鞭ととる道を選んだ。地域に根ざした強力なネットワークを持つ妻の口利きによるものだが、始めてみると意外にも性に合っていることに気づいた。生徒や親たちの評判も悪くなく、気を良くした私は、近所の大学でも、非常勤講師として週一回の授業を持つことになった。元傭兵のキャリアを活かして、テロ対策やセキュリティ、世界の紛争の詳しい実情などについて講義してほしいと請われたのだ。

学生たちがとりわけ強い興味を示したのは、三年前の『真佐吉事件』だった。

あの事件には私もリアルキラーズの一員として関わったわけだが（身近な人間は誰も知らない）、ヴァーチャ

ル世界ができた直後には、用済みとなつて解散した。働くのはヴァーチャル世界の私であつて、こちらではやることがないからだつた。

だからどんなことがあつたのか、具体的にはほとんど知らなかつた。ただ、傭兵時代によく行動を共にした真崎の失踪原因が、ヴァーチャル世界に連れ去られたためと判明してから、自力でいろいろと調べてみたのだ。

ヴァーチャル世界から無事に生還したのは、十九歳の女性と十四歳の少年のふたりだけだつた。真崎が向こうでどんな行動をとつたのかについては、ふたりの証言だけが頼りだつたが、彼らから得られるものはほとんどなかつた。

女性は帰還した五日後に覚醒したが、記憶には欠落部分が多々あつた。さらに遅れること二週間、ようやく目覚めた少年は植物状態であつたため、意思の疎通を回復するのに時間がかかつた。そして、回復後に母親を通じて発表したコメントによれば、女性以上に覚えていることは少なかつた。

それでも女性の語つたヴァーチャル世界での出来事は、世の中を驚愕、興奮させるに十分だつた。

リアル対リアルクリアーズの息詰まる戦いに人々は目を輝かせたし、米軍の容赦ない攻撃には誰もが怒りを覚え、一時期、日米関係に暗い影を落とした。もつとも、先月

製作発表されたハリウッド映画『鏡の国の少女』は、帰還したふたりの証言を元に、ヴァーチャル世界での出来事を忠実に再現するということで、米軍が撮影に全面協力するということもあり、両国間の険悪ムードもしいに解消されつつある。

ある日、意外な人物が我が家を訪ねてきた。落ち着いたダークブルーのスーツを着た女性は、なんとヴァーチャル世界からの生還者、光嶋萌黄その人だった。

TVや新聞でしか見たことのない彼女の来訪に、私は呆然とし、「入ってもいいですか？」と問われるまで、彼女の顔を見続けていた。

その日、妻と娘は買い物で隣町まで出かけていたので、私はお茶の準備をするのにあたふたとした。彼女はその様子をずっと笑顔で眺めていた。まるで旧知の友と久しぶりに再会したかのように。

すると、リビングのソファに腰かけた彼女は、開口一番にこう言った。

「ええ、わたしはシュウさんのことをよく知ってます。ヴァーチャル世界でわたしとシュウさんは、何日か行動を共にしてましたから」

またしても私は絶句した。そんな話は公にはされていない。そう言うのと、

「だって、誰にも話してませんから」

と彼女はいたずらっぽく笑った。

私は日本語を話すことができたが、彼女はとても流暢な英語を話した。

「この三年ものあいだ、海外のかたとも交流することが増えたので、必死で勉強したんです」

知っている。彼女は帰還後に入院していた病院を一カ月で退院すると、通っていた大学を自主退学し、父親の推薦もあって、京都工大のエネルギー工学研究所に就職した。人工ブラックホール生成の研究に、自分も関わりたいと願ったのだった。

以来彼女は、エネ研における父親の有能な助手として働いている。父親は近い将来、もう一度ノーベル賞を取るのではないかと噂されていた。

「雰囲気が変わりましたね」

私が言うと彼女は、えつと驚いた顔をした。

「いえ、もちろんお写真などでしか知りませんが、帰還直後に比べると、ずいぶん大人っぽくなられた」

彼女はフフフと微笑むと、

「髪を伸ばしたんです。それにちよつと痩せましたし」

そんなことではないと思った。ニュースなどで見る彼女は、最初こそ幼く映ったものの、この三年で随分と大人びた物腰を身につけていた。

「向こうの世界では、シユウさんに本当にお世話になりました。何度も危ないところを助けてもらったし」

それを聞き、私は素朴な疑問を口にした。

「私には腑に落ちません。リアル狩りという任務を帯びた私が、なぜあなたと？」

「聞いてもらえますか？ 長い話になりますけど」

私はもちろんと頷き、その前にお茶のお代わりを作ろうと立ち上がると、

「コーヒーがあれば、そっちのほうか」

と黒い瞳が私を見上げた。その顔には一層親しげな感情がこもっていた。

すべてを聞き終えた私は、ため息をつく以外に感動を表す方法を知らなかった。

そしてその内容は、公表されていた話とはあまりにも違っていた。

隊長代理となって現場の実権を握った真崎が、最後には自らのリアルパワーに乗っ取られて怪物に変貌したと。

笹倉防衛庁長官の暴走や、総理自らが演じてみせた巧妙な罠のこと。

そして、父である光嶋博士や野宮助教授、エネ研と伊椎研究所の連中のあくなき策謀のこと。

「リアル世界に帰還する際のショックで記憶の一部をなくした——もちろん嘘です。わたしは嘘について、事実のいくつかを話さずにいました。それは、こちらの世界に不必要な混乱を招きたくないからではなく、わたしに、ある計画があつたからです」

あらためて彼女を見た。つぶらな瞳は、地底湖の水面のように冴え冴えとしていた。

「生還して目覚めたベッドの上で、わたしは自分に課された新たな使命を実感しました。それはわたしに味方し、助けてくれた人たちへの恩返しでもあります」

水面が泡立ち、彼女の口調が熱を帯びていく。

「わたしは大学を退学しました。娘のわたしに手に掛け、た父に協力することも厭いといませんでした。覚醒直後の炎君にも大事なことはしゃべらないでと説得しにさえ行きました」

むんにも迷惑かけたなかったから、会わへんようにして、と最後はぼそつと日本語でつぶやいた。

彼女の全身から強い決意が伝わってきた。メディアを通じては伝わってこないものだった。私はそんな彼女に興味をそそられた。ヴァーチャルの私も同じ思いだったのかもしれない。

「……優等生的な生還者を演じ続けてきたのは、すべて、その計画を遂行するためです」

彼女は一気にしゃべると、興奮したことを恥じたのか、左手で持ったソーサーの上に右手のカップを置いた。

私は少し落ち着かせるべく、話を変えた。

「左腕の調子は、どうですか？」

「おかげさまで、すっかり馴れました」

彼女はソーサーをテーブルに置くと、左の手の平を開いたり閉じたりしてみせた。彼女の左腕が義手であることは世間によく知られている。

生還した際、左腕の付け根から大量の血を流していた彼女の助かる可能性は五分五分だと言われた。長時間に渡る手術がおこなわれ、五日後に目を開いたとき、世間は彼女に対して拍手喝采を送った。勝利のヒロインとして英雄視した。以来、時の人となった彼女に目をつけた企業は多く、無償で義手を提供しようという申し出が世界中から押し寄せた。彼女はの中で最も技術力の高いメーカーを選び、左腕を取り戻したのだった。

「でも調整が難しくて。スペアもないから、何とかしてもらおうと思って、今回わざわざこちらの本社まで出てきたんです。シュウさんのところに寄れたのも、そんな口実があったからです」

「よく私の家が見つけれましたね」

実は、シュウ・クワン・リーは本名ではない。傭兵をやっていると、さまざまな恨みを買うことがある。後々

命を狙われる怖れもあるので、仕事の際はあくまで偽名を通していた。

彼女は待つてましたとばかりに微笑むと、バッグの中から携帯電話を取り出した。開くと液晶画面にP A Iが現れた。

「ほう。それが噂に聞く、モジ君ですか？」

「モジ2号にバージョンアップしました。こちらのネット世界に棲んでいたギドラを捕獲して、モジの一機能として取り込んだんです。身体は少し金色がかったでしょう？ それにほら」

彼女が指さしたモジの頭には、三本の角が生えていた。「なるほど」私は頷いて、先を促した。

「ギドラの能力を得たモジに見つけ出せないものはありません。それでもここだという確証を得るのに一週間かかりましたけど」

私は降参するように両手を上げた。

「そうまでして、私を捜したのはどういうわけで？ ただ懐かしくてオリジナルに会いにきたという風には見えませんが？」

そう言つて水を向けると、彼女は少し俯いて、じつとコーヒーカーップを見つめた。傾いた西日が当たった頬からは、さっきまで浮かんでいた柔らかな笑みは消え失せていた。私は立ち上がったってカーテンを引くと、彼女の

カップにコーヒーを注ぎ、黙ってソファに戻った。

窓の外を子供たちがバスケットボールを弾ませながら駆け抜けていった。

彼女はようやく顔を上げると、

「助けてほしいんです。ここから先はリアルパワーもなわたしひとりでは無理なんです」

2

一度口が開くと、怒濤のように言葉が流れ出した。

彼女は言った。人工ブラックホールの平和利用という合意を世界主要国と取り交わしたのが三年前。ところがまたぞろ裏の世界で、新技術の拡散と、兵器利用の懸念が増大しているという。そしてその糸引きをしているのが、平和利用の中心的役割りを果たすはずだった伊椎研究所だというのだ。

「私は当初からこうなることを恐れていました。だからこそ、味方の顔をして彼らの懷に飛び込み、これまで監視してきたんです。すでにいくつかの機密事項が良からぬ団体に流出しています。——世界は悪い方向に進んでいます。このままでは昨年以上の災厄がこの世界を襲うことは確実です。わたしにはそれを阻止する義務があります」

私はそれは確かなことかと訊ねた。

「はい。関係者のやりとりするメールはすべてモジ2号がチェックしています。明白な証拠をいくつもつかんでいます」

「それで、あなたはどのように？」

彼女はぐくりとつばを飲み込むと、他に聞く者もないのに声のトーンを落とした。馴れた言葉のほうがいいのでは？ と助言すると、彼女はホッとしたように、日本語で話し出した。

彼女の秘めた作戦とは、人工ブラックホール生成に関する全てをこの世から消し去ることだった。

対象となるのは、コンピュータやネットワークサーバ上に存在する実験データや資料、文献。そして生成装置本体などのハードウェア。さらには開発に携わった研究者たち。

私は首を振った。あまりにも荒唐無稽なことに思えたからだ。ところが彼女はいたって真剣で、実行するのは同時でないと意味がないと話を先走らせた。

「待ってください、光嶋さん」

「萌黄て呼んでください」

「萌黄さん、まだ私はあなたのご依頼を受けるとは言ってませんよ」

すると彼女はバッグから重そうな包みを取り出すと、おずおずとテーブルに置いた。

「お仕事の代金として用意しました。足りるとええんですけど」

中をあらためさせてもらった。かなりの額のドル紙幣が入っていたが、大雑把に見積もっても手付けと準備だけで足が出そうだった。

「エネ研のお給料に、政府からもらったお見舞金を足しました。これでできる範囲で構いませんから」

どうかお願いしますと膝に両手をつけ、日本流に深々と頭を下げてみせる。

そんな彼女の頭越しに、背後にあるサイドボードに嵌め込まれたガラスに映る私の顔が見えた。私にはそれが、ヴァーチャル世界の私が「力になってやれよ」と言っているようにも見えた。

「判りました。もう少し具体的なお話を聞かせてくれませんか」

彼女が自ら立てた作戦のあらましはこうだ。

第一に、コンピュータやネットワークサーバ上に存在するデータ。これらに対しては、彼女の命を受けたモジ2号が、自らのコピーを大量に作り、データの近くに張りついて、示し合わせた時間に破壊活動を起こす。

第二に、すでに作られてしまった生成装置の破壊。現在のところ、完成品はエネ研に一台存在するだけだという。しかし近々完成する、より安定度の増した二号機が、伊椎研究所とアメリカ側の取り決めによって、アメリカに移送されることになった。これを日本から出る前に破壊する。当然、彼女にできることではない。だから私に白羽の矢が立ったのだ。

そして第三に、開発者たち。彼らがいてはデータがなくなるのが試作機が壊れようが関係はない。最も危険な存在である。だからといって暗殺するわけにもいかない。そこで彼女は一計を案じた。その細部の検討と実際におこなうのは私にまかせたいと言った。

これらの作戦は、彼女が言ったとおり同時に起こす必要があった。さもなければ妨害に遭うことは確実だ。

「困難な作戦になりますが、うまく事が運んだとして、あなたはどうするんですか？ ブラックホール技術を欲しがっている国や裏組織を甘く見てはいけませんよ。いずれは勘づかれ、命を狙われる」

「覚悟はできてます。それに責任は取るつもりです」

「責任を？」

彼女は口を真一文字に結び、両方の拳をぎゅっと握った。その思いつめた様子にいじらしさを感じた私は、思わず言わずにいられなかった。

「事が終わったらどこかに身を隠すといい。私が手配しましょう」

お世話をおかけしますと彼女は頭を下げた。

三カ月後。

作戦はほぼ完璧な形で完了した。

データについては、日本国内はもとより、アメリカや一部の国に散らばったものまで、きれいさっぱりと消えてしまった。もはやネット上で、真佐吉の書いた文献を閲覧することすらできない。

そこまで徹底してなされたから、一部の機関では思いもよらぬ不具合が発生した。『ブラックホール』というキーワードを含むファイル自体、存在しなくなってしまったのだ。モジ2号は実に容赦ない仕事ぶりを発揮したようだ。

データや原理、仕組みを脳内に持っている研究者たち。彼らには、装置を輸出禁止国に売ろうとしたという、ありもしない（一部は真実だが）容疑をでっちあげ、警察に架空の情報をリークし、ことごとく逮捕せしめた。これで「ブラックホール生成は危険」と小声で叫んでいた野党の連中や市民団体は息を吹き返すだろうし、山寺総理ら支持派らはことごとく窮地に立たされるだろう。そして、同じことはアメリカ側にも言えた。

最後に、装置の破壊についてであるが、非常に残念なことに、ここで重大な手違いが生じてしまった。作戦の守備を『ほぼ完璧』と言わざるを得なかった理由はここにある。

作戦決行の当日、光嶋萌黄はエネ研の地下十階の研究室にいた。光嶋博士の娘であり有能な研究員でもあった彼女は、他の所員たちが筵^{むしろ}潟教授の退官記念パーティーで出払ったその日、ひとり居残って、ブラックホール生成装置の調整をおこなう予定をしていた。もちろん内部に不案内な私を手引きするためだった。

校内敷地への侵入は、私にとってさほど難しいものではなかった。そして、かねてから打ち合わせていたとおり、建物のそばに植わっている木に登って夜を待ち、壁にロープを引っ掛けてよじ登ると、エレベータ室をこじ開け、箱のひとつを選んで天井に降り立った。エレベータは一定時間誰も乗らないと、自動的に一階か、頻繁に乗降のある地下十階に止まるようセットされている。私は誰にも怪しまれることなく、やすやすと目的地に到着した。

萌黄はエレベータの扉の前で待っているはずだった。ところがそこで私を出迎えたのは、大きな作動音だった。私は使い慣れた銃を腰から抜くと、警戒しながら室内に

入った。

明るい照明に煌煌^{こうこう}と照らされた研究室に人の気配はなく、私は音に引き寄せられるように部屋の中央へと進んでいった。

作動音を発していたのは室内の真ん中に据えられたブラックホール生成装置だった。私が前に立った時、巨大な円錐は、先端の傾いた状態から鉛直向きへと戻るところだった。

「萌黄さん？」

呼びかけても返答がない。

装置に爆破装置を仕掛けた後、私は彼女を連れて脱出する手はずだった。ところが肝心の彼女がいないのだ。

警備員が次に見回りに来るまで二十五分。急がねばならない。私は装置の周囲を巡った。

その時、異臭が鼻についた。記憶と照合するまでもなく、肉のただれるにおいと判った。

装置を覗き込むと、熱で曲がったベッドが倒れており、周囲には、黒く焦げたゴミのような塊がいくつも落ちていた。

その中に照明を反射して鈍く光る棒状の金属を発見し、私はイヤな予感に襲われた。

私は手すりを乗り越え、焦げたゴミの中からそれを拾い上げた。左手の義手だった。付け根の部分に皮膚の一

部がかろうじて付着していた。

『責任は取るつもりです』

彼女の言葉がよみがえる。

私は義手をそっと床に置くと、装置に向き直り、持ってきた爆薬を彼女に教えられた装置のウィークポイントに仕掛けた。続いて、隣接して置かれていた二号機にも同様に仕掛けると、急いでエレベータに戻り、再び屋上へ上がって、外壁を伝い降りた。

大学の外に出て爆発時間が来るのを待ち、にわかに学内が騒がしくなったのを見届けてから、私は静かにその場を立ち去った。

こうして任務は終わった。

非常に後味の悪い気分を引きずりながら――。

3

翌日の新聞やネットニュースは、三年ぶりにブラックホール関連のネタで埋まった。中でも『ヴァーチャル世界からの生還者、光嶋萌黄さん行方不明』の見出しの大きさは、他を圧倒した。

数日後の報道では、現場検証の結果、爆発の原因は、電源部のショートによって装置が勝手に動作し、エネルギーが臨界点を超えたための暴発説が有力とあった。彼

女の思惑どおり、爆発は事故として処理されそうだった。しかし私にとってそんなニュースはいつでもよかった。〈光嶋萌黄さん、事故死か？〉

その見出しを見つけると、続く記事を私はむさぼるように読んだ。記事はこう書いていた。現場から萌黄さんの左腕（義手）が発見され、義手や装置からは彼女のものと思われる皮膚の断片が多数採取された。おそらくひとりで装置を点検していた時、運悪く爆発に巻き込まれてしまったのだろうと。

ただこの見解には疑問があるとの意見も載せられていた。爆発に巻き込まれたにしては、遺骸の量があまりに少ないというのだ。ただそれも、プラズマ放射を浴びれば考えられないこともないと締めくくられていた。

事態は光嶋萌黄が思い描いたとおりに進行した。

ブラックホール生成装置の開発は、関係者が一斉に検査されたことで頓挫し、やがて否定的な考え方がマスクミを賑わせ始め、引き継いでやろうというものは現れなかった。

『ブラックホールは悪』。

再び世間は声高に叫び始めた。伊里江真佐吉がかつて浴びた罵声と同じ風潮が世の中に蔓延した。

勝手なものだなと私は嘆きにも似たため息を吐いた。

二〇一七年の今日、世界の価値観はますます迷走するばかりだ。教職の身分となった私は、傭兵時代には考えもしなかったことに悩む自分を振り返り、苦笑した。

ただ、ひとつだけ中止されなかったものがある。彼女を主人公にした映画製作である。

最後には装置開発に協力していたにもかからわず、光嶋萌黄という存在は、死んだことによつてますます神格化されていた。意外にも目を追うごとに「彼女は人工ブラックホールの危険を身をもって示したのだ」という意見が主流を占めていった。そのあまりの人気沸騰ぶりに、なんと映画は三部作で公開されることに変更された。ちなみに私も登場するそうだが、本名が知られていないため、我が家にインタビューが押し寄せる心配は、残念ながら、ない。

光嶋萌黄は本当に死んだのか？

自らのしたことに責任を感じ、我が身をプラズマにさらして自殺したのか。そう考えることにいささかの無理もないし、彼女らしいとも思えるが、ひょっとして彼女は私にさえ死んだと見せかけて、どこかで生きているのではないか。私の心は根拠もなくそんな見方に傾いたりするのだ。

もやもやとした気分がつのり、授業をおこなっていて

も集中することができず、凡ミスを連発した。

「疲れてるのよ。有休を取って休んだら？」

妻の意見に私は賛成した。そして娘も連れて三人で一週間の休暇を取ることにした。先だつての夏休みは日本での作戦に忙殺されたため、今回は思い切つて、家族サービスも兼ねて旅行に出かけることにした。とは言え、疲れる長距離ドライブは避けたい。そう思っていた矢先、あるニュースを読んで、私は叫んでいた。

「ハリウッドに、映画撮影を見学しに行こう！」

私を捉えたニュースは『鏡の中の少女』のメインキャストオーディションがおこなわれることを告げていた。

娘も妻も賛成してくれたので、我々は愛車に乗って、一路、映画の街を目指すことになった。

実のところ、私はオーディションなどに興味はなかった。私を動かしたのは、日本から駿河炎少年が審査員として招待されるという一点だった。

彼には一度会つて、話してみたいと以前から思っていた。その彼がすぐ近くに来るのだ。これを逃す手はない。

『うわっ、リアルのシュウさんだあ！』

突然の夜の訪問にも、炎少年は快く部屋に招じ入れてくれた。場所はハリウッドの超豪華ホテルの一室。少年も萌黄に劣らず世界的な有名人であるため、部屋の前に

は護衛が付いている。そのひとりとはかつての私の部下である、私は彼に頼み込み、こうして会うことができたのだった。

「そんなに似ている？」

『当たり前じゃないか。でも微妙に違うな。やっぱり人間の顔は左右逆にすると変なもんだね』

初対面なのに、彼の声には特別な親しみがこめられていた。彼の母親もそれに安心したのか、「買い物に出かけてくるわ」と気を利かせて席を外してくれた。

あらためて少年を眺める。ヴァーチャル世界では自力で歩くことができ、自分の目で見て、しゃべることができたらしいが、こちらに戻った途端、リアルパワーの加護が消え、元の全盲の身体に戻ってしまった。だから現在も車椅子と機械の目、耳、鼻、口に頼る日々なのだ。

『でもね、二年前には人差し指が動くようになったし、去年は首を動かすことができるようになったんだ。だからどんなに忙しくても、毎日のリハビリは欠かさないよ』

彼はいま、母親の設立した炎医学研究所で、自分の病気を自ら克服すべく、研究に没頭する日々を送っている。さらには講演の要請にも積極的に応じ、自らの体験を人々に語ることに生き甲斐を感じているという。

『わがままボーイは卒業さ。そんな遊んでる暇はないか

らね』

私は彼を訪ねた理由を切り出した。もちろん私のもやもやの原因である、光嶋萌黄の生死に関してだ。

『俺も聞いた時は落ち込んだよ。向こうの世界じゃ、どんなにピンチになっても、しぶとく生き延びてたのになあ』

今回も彼女の生きている可能性はあるだろうかと問うと、

『えっ、死んだんじゃないの？』

と驚きの声を発した。

もし生きているなら、爆発以後、彼の前に姿を現したのではと、若干の期待を持って訊ねたのだが、どうやらそんなことはなかったようだ。もつとも人工音声では、声色から少年の心の内を覗くことなどできないが。

『でも生きてたら隠れる必要なんかないだろ。お父さんが逮捕された機密の漏洩事件だって、あの萌黄さんが関わってるわけないしさ』

同感だった。そうなるとますます彼女の生存説に根拠がなくなってしまう。

『そういえば萌黄さん、亡くなる一カ月前に俺を訪ねてきてくれたんだ』

「へえ」私は心の驚きを隠しながら少年の表情のない顔を見上げた。「どんな話をしたのかな？」

『こんなこと言ってたっけ——わたしはブラックホールの秘密をとことん追求したいと思てんねん。何でも飲み込んでしまうあの黒い星の向こうには、まだ誰も気づいてない、この宇宙の真理とか秩序みたいなものがあるよな気がする——萌黄さんは、將軍って呼ばれた五十嵐のジイさんの言葉が印象に残ってたらしい。へこの世に必要なでないものはない。私らがリアルに選ばれたのも偶然ではない。』。きつと宇宙が萌黄さんを選んだと感じたんじゃないかな。俺だってそう感じることもあるよ。一度あの光の道を通過した者だけが抱く感覚かもしれないけどね』

私には彼の言うことが理解できなかった。少年はアハと笑うと、

『俺だって理屈の上ではそんなことあるかと思うさ。でも萌黄さんは、あの世界から帰還する途中で、俺以上にいろんなものを見たのかもしれない。』

ワケの判らないことだらけの世の中だけど、人間の起こすゴタゴタも、宇宙の果てはどうなってるのかも、全部ひっくるめて説明できるような論理がどこかにあるとしたら、彼女はその一端を垣間見たのかもしれないよ』
ふむ、と私は妙に納得できるような気がした。

「もしそうなら、不幸なヴァーチャル世界の人々も救われるかもしれないな」

『死んじゃったら元も子もないけどね』

そうだ。彼女は死んだのだ。何を思いわずらうことがある。私は腰を上げた。

「会えてうれしかったよ」

『俺もっ』

私はアームレストに置かれた彼の手の甲に自分の手を重ねた。すると少年の指がぴくりと動いた。

『ほらね。ほんの少しだけど、自分の意思で動かせるんだ。いつかヴァーチャル世界で自由に動けたように、自分の足で他人を蹴って、自分の口で思う存分誰かの悪口を言ってやるんだ』

「その時は、私が世界じゅうの悪玉を案内して回ってあげるよ」

私は少年と再会を約し、ホテルを後にした。

街はネオンの洪水にあふれていた。

さすがにハリウッドだ。陽が落ちてますます街は活気に満ちている。私は夜の道をホテルに向かってとぼとぼと歩いた。

炎少年とのやりとりを思い出す。すると、一度は萌黄の死を受け入れたはずなのに、もしやという気分がジュラシック・パークでよみがえった恐竜のように頭をもたげてきた。

研究に意欲を燃やしていた光嶋萌黄。

すべてを消し去ろうとした光嶋萌黄。

ふたつがどうしてもひとつに合わさらない。かといって、どちらか一方を否定することもできない。

いつしか私は小さな公園に迷い込み、薄汚れたベンチに腰かけていた。すぐ前をタクシーがひっきりなしに通り過ぎていく。

何気なく見上げた道路向こうのビデオショップに、怪獣をあしらったポスターがでかでかと貼ってあった。ハリウッド版ではない、日本のゴジラ映画だ。

私はハツとした。モジ2号はどこへ行った？

作戦終了と共に、P A Iまで消されたのか？

私が彼女なら、数々の貴重なデータをP A Iを使って一カ所に集めておく。世界から全データがなくなつたいま、それは天文学的な価値を持つだろう。

石油など足許にも及ばない無限エネルギー。私のような凡人は、データをオークションにかけて値段を吊り上げて売り飛ばし、一生遊んで暮らすことを考えてしまう。

彼女に限ってはそんな俗物めいた感情とは無縁だ。

三年前、体調が回復すると各メディアはこぞって彼女に取材攻勢をかけた。そんな時、彼女が折りに触れて訴えたのは、同じリアルとして闘った友の名誉回復だった。その甲斐あって、今では真佐吉の弟・真佐夫を悪く言う

者はいない。また、小田切ハジメにあつては、刺傷事件の再捜査がおこなわれ、真犯人が自首してきたことでハジメの疑いは完全に晴れた。そして、京都在住の芸術家、ビッグジョーク齋藤の娘に会ったこともスクープされ、遺髪を直接手渡したことが感動的な話として紹介された。メディアに登場する時、彼女は常にノーギャラを条件に受けていた。時の人となつても売名行為と非難する声はほとんどなく、世間は常に彼女の訴えを後押しした。

そうなのだ。どんなに意地悪い色眼鏡を通して、彼女からは俗物的なイメージは湧いてこない。私はわずかな時間でも彼女を疑ったことを恥じた。

彼女は全てのデータを持って、どこか誰も知らない場所の研究を続けるのだろうか。自らの感覚の命じるままに――。

それでも腑に落ちないことはある。失踪した彼女が自由に研究できるような、そんな都合のいい場所があるのか？ 淡路島洲本沖の伊里江兄弟の秘密基地でさえ、彼女の話を書ける捜索隊が徹底的に調査し、いまは解体され、消滅している。

ましてや彼女は片腕である。義手にスピアはないという言葉を信じるなら、彼女は片手で生きていかねばならない。なぜなら、役に立つ精巧な義手を新たに作ろうとすれば、人前に自分の身体をさらす必要がある。そうで

なければ自分に適合した腕など得られはしまい。当然顔も割れよう。世界的有名人の彼女である。今回の映画化でも、主役には彼女に酷似するアジア系の女優が求められているくらいだ。

私はベンチを離れた。

結論は依然として出ないが、それでも少しは気が晴れた。それは彼女が生きていることを信じる気になったからだ。

きつと今頃、どこかでコンピュータと格闘しているに違いない。

そして、また困った事態が起きたなら……きつとまた、我が家のドアをノックしてくれることだろう。

私はよしと叫ぶと、ホテルに向かって歩き出した。

4

「お疲れさん」

女将は勝手口から入ってきた男にねぎらいの言葉をかけた。

「今日は結構、いいのが取れましたよ」

男は威勢のいい声で、手につかんだ魚を、高々と差し上げた。

「まあまあ、今夜も料理長の腕の見せどころね。お客さ

んもきつと喜んでくださるわ」

「それじゃ、いつものように冷凍庫に入れときますね」
料理長と呼ばれた男は若者たちに指示して、いっしょに大漁の獲物を、奥へと運んだ。

首筋にタオルを巻いて戻ってきた男を、女将はちよいとと言つて手招いた。

「久保田さん、あなたにお手紙が来てるわよ。はい」

「いつもすいません」

手渡された封書を開くと、懐かしい文字が並んでいた。
久保田は日に焼けた目尻を和らげると、事務所の椅子に腰かけて文面を読んだ。

『拝啓 やっほー、久保田さん、元気にしてるー？ 柳瀬ちゃんは今日もタロちゃん背負つて、右へ左へと大忙しです。コンサートツアーもいよいよ大詰め。オーラスまでベルトの風車全開でがんばります。それから例の日取りの件、ちゃんとタロちゃんのスケジュール空けてあるので安心して。ワタシも楽しみにしてるわ。奥様にもよろしくねー。 あなたの柳瀬より』

二枚目は、別の筆跡によつて書かれていた。

『変わりないですか？ 加太の夏は今年も熱いんでしょね。今夜の僕は小樽にいます。たったいま一仕事終えて、ホテルにたどり着いたところです。さすがこの年齢になるとツアーがキツくなってきましたよ。でも来年は

映画の撮影が立て続けに入るし、ナマの僕とは、しばしお別れってことでファンサービスにも気が抜けません。

久保田さんが提案してくれたシークレット同窓会、むちゃくちゃうれしいです。柳瀬が書いてると思いますが、その日は何が何でも加太にすっ飛んでいきますので、どうぞよろしく。美味しい魚を食わせてね。でも全員集まるのかな？ おっとそれは当日のお楽しみですね。

ふたり目のお子さんがもうじき生まれるそうですね。今度こそ〈あの名前〉が付けられるよう、僕も祈っています。

先月リリースしたアルバムを同封しました。音楽に縁のない久保田さんのことだから買ってくれてないと思いますして……。特にシングルカットした『彼女はリアル』はこれまででナンバーワンのヒット曲になりましたが、僕が作詞した自信作です。一緒に歌えるよう練習しておいてください。ではまた。 揣摩太郎』

確かに封筒にはCDが入っていた。久保田は参ったなあとケースの角で頭を掻いた。

今日、妻の美穂は娘のむんの手を引いて、病院に定期検診に行っている。彼女のお腹にはふたり目の子が入っている。ところが、早くも命名のことで、ひとり目の時のいざこざが再燃しているのだ。

男の子だったら『シュウ太郎』。これには彼女も異存

はない。もつともシュウの字を何にするかは未定だが。

問題は女の子の場合だ。久保田は『萌黄』にしたいと思っている。これはひとり目の時にも提案したのだが、美穂は言下に却下した。「まだ未練あるの？」と鋭い視線で久保田をビビらせてくれた。そうじゃないといくら言っても取り合ってくれない。この辺りは旧姓和久井時代からちつとも変わらない。

（ひとり目は折れて第二希望にしたが、今度こそ！）

彼は太い腕をむきむきと膨らませ、ことさら気持ち鼓舞するように胸を反らしたが、その時、腰ベルトに通したケースの中で着信音が鳴った。取り出すと、美穂からだった。

「……ナニ？ 性別が判ったア？ ちよつとまで、その勝ち誇った口振りは何だ!?」

電話はすぐに切れた。久保田は深い息をひとつ吐くと、口許に苦笑めいた笑みを浮かべて肩を上げると、夜の仕込みをおこなうべく、厨房に入っていた。

ふと記憶が過去へと飛んだ。

あの事件が片付いた後、久保田はやつと近江八幡の妹夫婦を訪ねることができた。彼らは久保田を歓迎してくれ、しばらくは義理の弟の実家を手伝って農業に従事した。

世界は平穏な日々を取り戻した。

当初は、自暴自棄になった連中が大きな騒動を起こすのではないか、略奪や暴行が多発するのではないかという懸念が、人々の心を強く支配していた。

だが心配は全くの取り越し苦労に終わった。

誰もが一樣におとなしく人間へと変わっていったのだ。いや、こわごわ、ビクビクといったほうが当たっているだろう。

何でもない怪我が命取りになりかねない世界である。

おかげで世界各地の紛争地帯から、銃声や砲声がパツパツと聞こえなくなった。たった一個の手榴弾が、どれほど壊滅的な被害を相手に与えるかは容易に想像できるし、逆にそれは、自分が死ぬ可能性も飛躍的に増大したことを意味していたのだ。

この世界の生命は、ガラス細工のようにもろい。

それを思い知らされた人類は、傷つき傷つけることを極端に怖れ、避けるようになった。ある学者はそんな変貌ぶりを、種の保存の本能だと説明した。

笑い話のようだが、ヒゲ面の男性が増えた理由も、刃物を顔に近づけたくないことの現れであるらしい。

さてそんなある日、ひよつこりと和久井助手がやってきた。そして何となく地元に溶け込み、妹と意気投合し、あれよあれよと久保田は彼女と結婚していた。

「なんでかなあ。なんだかなあ」

そして娘が生まれた頃、加太の女将から連絡があり、漁業の再開が知らされた。信じられないことに、冷凍した状態で捌けば砂状化は起こらなかった（残念なことにまだ動物の肉では成功していない）。その方法を伝え聞いた女将は、観光旅館を再開するので、是非手伝ってほしいと言ってくれたのだ。

海のおいが恋しくなっていた久保田は、一も二もなく承諾し、美穂と娘のむんを連れて和歌山に引っ越した。そして今日に至るのである。

「ねえ、ちよつとちよつと」厨房に入った久保田に女将がスススと近づいてきた。目が異様な光を帯びている。

「しあさつての同窓会、カゲヒナタさんも来るよね？」

久保田があわてて唇の前で指を立てた。

「秘密ですから、声を落としてくださいよ」

「あらあ、判ってるわよく、そのくらい。ウフフフ」

女将は初代カゲヒナタからのファンだ。そして二代目カゲをP A Iのカバ松が襲名した今は、新生カゲヒナタを全精力で応援している。

「ちゃんと参加するってメールが来てますから」

「やった！　うれしいなあ」

女将は鼻歌を歌いながら、踊るように自室へ引き上げていった。

十年ぶりの同窓会。

あの日、萌黄と炎少年を見送った面々が、久しぶりに集まるのだ。もちろん秘密である。そうでないと、女将のようなカゲヒナタファン、そして揣摩のファンが大挙して押し寄せることは必定だ。

そうそう、忘れてはならないもうひとり。影松清香は海外での公演を終え、日曜の夜には関空に到着するといふから、こちらでも大丈夫だ。彼女は変装が得意だそうだから、ロビーで待ち伏せしているファンやマスコミもうまく撒くことだろう。

久保田は指を折って、参加人数を数えた。その指がふと止まった。あとひとり。ひとりだけ居場所が不明の男がいる。

シュウ・クワン・リーとはあれ以来、音信不通である。全員となれば彼も呼びたいし、皆も同じ思いのはずだった。ところが彼は連絡先を残していかなかった。政府もリアルキラーズの情報を一向に開示しようとしない。

（ええい、考えていてもどうにもならん）

久保田は窓を開いた。道路を隔てたすぐ先に海がある。萌黄とむんが伊里江の水中船で、たまたまたどりついたのはここだ。

奇妙な縁だった。そしてとんでもない経験をした。あんなことは二度とご免だ——当時は何度も思ったものだが、時間が経つにつれ、懐かしく感じるが増えた。

もう会えない人々が夢の中に出てきたりもした。

（萌黄さんも、炎少年も、元気にやってるだろうか）

青空の下、道路も波除なみよけもじりじりと焼かれている。空
気も揺らめいている。こんな日に海水浴なんぞしたら、
焼けた背中から砂状化して、砂浜と同化しちゃうな。

青い海。停泊する漁船。麦わら帽子でそぞろ歩く親子
や竿を持った釣り客たち。どの顔にも温和な表情が浮か
んでいる。まるで争いを避けるうちに、争いかたまで忘
れてしまったかのように。目の前を通り過ぎる車でさえ、
制限の半分以下の速度でゆっくりと走っていく。

今となつては、ヴァーチャル世界に放り込まれたこと
を恨んでいる人間はほとんどいないのではないか。真佐
吉の禍々しい憎悪によって作り出された世界。それを知
らない人間はいないのに、人々はこの世界を愛し始めて
いるようだ。

ふと目が道路の先にある小さな橋に止まった。わずか
に中央の反り上がった向こうから男が歩いてくる。この
猛暑の中を黒いポロシャツにグレイのスラックス。それ
でも服の下引き締まった身体は隠せない。さらにサン
グラスの下には精悍な風貌が見え隠れしている。

「まさか……」

思わず声が漏れた。久保田は窓を離れ、厨房を走り出
ると、全速力で玄関を飛び出した。そして太陽の照りつ

ける道路を駆け、男の前に立った時、久保田はあまりの懐かしさに声も出なかった。

男は久保田の足許を見て、少し首を傾げると、その顔を上げて言った。

「この町では、みんなスリッパで外を歩くのか？」

あわてるあまり、靴に履き替えることも忘れていたのだ。久保田は苦笑いしながら前に出ると、手を差し出した。シュウはサングラスを外したが、その手は握らず、ガバツと久保田の身体を抱きしめた。

「相変わらず魚臭いな」

「あんたは硝煙のにおいが抜けたんじゃないか？」

「そりやそうだ。今じゃ教師さまだからな」

「嘘だろう？ ハハハ」

久保田はひとしきり笑うと、真顔に戻って訊ねた。

「ここへは、どんな用事で？」

するとシュウはボストンバッグを持った手を大きく広げて、

「それはまたご挨拶だな。同窓会をするっていうから、わざわざアメリカから来たのに」

「そのこと……誰から聞いた？」

「君が全員に案内メールを出したんじゃないか」

「それはそうだが、内輪だけの秘密の集合だし、誰もあなたの連絡先を知らないはずだが」

するとシュウは、もつともだと頷くと、

「実は数日前、ある人から教えてもらったんだ。だから取るものも取りあえず、こうして馳せ参じたというわけさ」

「ある人？」

シュウは身体をねじって、後ろに顔を向けた。

「今日もここまで案内してきてくれたんだ。ほら、来た来た」

久保田は目を橋のほうに向けた。

振り返った向こうから、頭の方、顔、肩とその人物は、徐々に姿を現した。

「あ……あ……」

久保田は自分の目が信じられなかった。

その女性はこの世のものとも思えぬ涼しい風を連れて、彼のそばまでやってくると、すっと足を止め、にっこりと微笑んだ。

「——おかえり」

久保田はそれだけ言うのが、やっとだった。

〈完〉